

「話すこと・聞くこと」を なぜ学習するのか



信州大学助教授 藤森 裕治
ふしもり ゆうじ

学生相談室のいま

大学の学生相談員をなさっている方から、こんな話をうかがった。

最近、相談室を訪れる学生で、対人コミュニケーションがうまくゆかないことに悩みをもっている人が目立つ。対人コミュニケーションといっても、一对一のそれに関する悩みではない。彼らは、大勢の人に向かって話された内容がまったく耳に入らないのだという。例えば大学の授業で講義を聴いているとき、ちゃんと聴こうと耳を傾けているのだが、なぜか教官の声が体をすり抜けてしまい、何一つ情報が残らないというのである。

この話をうかがった当初、私は話す側の問題が大きいのではないかと感じていた。教官の講義があまりにも専門的だったり脈絡が不鮮明だったりして、まぶた 瞼を開き続け

「媒体」として認知するために、極めて重要な音みである。

一对一の関係でやりとりされることは、基本的に場面の状況に依存する。子どもが「遊びに」行っていい?」「と尋ね、母親が「(宿題は)終わったの?」「と返しても、互いの意思疎通になんら齟齬そごをきたさないのが「対一関係のコミュニケーション」である。このような状況でやりとりされることを、言語心理学では「一次のことば」、あるいは「直接的対話」という。中田基昭氏の調査によれば、小学校低学年の教室では、先生が全体に向かつて説明したはずの内容を個人的に聞き返しに来る児童が少なくない。これは、彼らがまだ先生と自分との関係を「対一のそれにおいてしか認知できないからである」と考えられている。

しかし、子どもたちは学校や地域社会の集団活動に参加するうち、自らを集団の一員としてとらえるようになってゆく。学級会で話し合ったり、「いっこ」遊びに興じたりしながら、集団活動の場を共有する一員としての振る舞いが、言語運用においても現れるようになる。例えば、学級会である子が「今度のクラス会はみんなで劇をやりたい。」と提案し、「劇よりも合唱の方がいい。」という反対意見が示されるとき、彼らはこれを特定個人に向けて発しているのではない。クラスという属性を共有する他者一般に向けて、自分の伝えたい内容を記号化

るのに難儀した経験は私にもある。しかし、先の先生によればそういう問題とは次元が異なるという。いったいどういう状況なのか。さらに詳しく尋ねると、こんな答えが返ってきた。

彼らは、他者のことばが自分一人に向けられていねば、その内容を把握し応答する力は持っている。ところが、他者のことばが不特定多数を相手にしているとき、自分をその一員とみなして他者の発言に耳を傾けることができなくなってしまうらしい。つまり、EとYOUの関係であればまったく問題を生じない「コミュニケーション」が、EとTHEYの関係になった途端、自分をTHEYの部分集合として認知できず、断絶してしまうというのである。その証拠に、大学の講義のみならず、街角などで耳にする大衆に向けてのメッセージでも、彼らは同様の事態に陥るのだという。

一次のことばと二次のことば

この話を耳にしたとき、私は子どもの言語発達に関する岡本夏木氏の研究を思い出していた。氏によれば、子どもがことばを獲得し始めるころ、そのコミュニケーションは大半が一对一の関係である。なかでも母と子の「コミュニケーション」は、子どもがことばを社会生活に必要な「道具」として、また、互いの信頼関係を保証する

しているのである。

「うつした」ことばは、書きことばの能力と相関しながら、子どもの発達につれて豊かになってゆく。その際、子どもたちは自分を集団の一員として位置づけ、ことばの抽象性を自覚しながら他者とかかわる。このような状況において運用されることばを、「二次のことば」、あるいは「間接的対話」という。主体が社会人として自立するために、このタイプのことばがいかに必要であるかは論をまたない。

再び、学生相談室のいま

右に挙げた「二つの」ことば「を冒頭的话题に照らし合わせる」と、問題の学生たちが抱えている状況は、さしあたり次のように解釈することができよう。すなわち、かの学生たちは、言語生活において「二次のことば」としての話じことば「コミュニケーション」が、十分に経験されていないのではないか。そのため、彼らの話じことばは「いまだに」「一次のことば」の世界を漂っているのではないかと。

確かに、昨今の高校・大学生の日常的な「コミュニケーション」を観察していると、この解釈を支持すべき状況を指摘することができる。彼らはひっきりなしに友人とケータイで連絡を取り合う。その場にはいない相手と「対一

の関係結び、メールを送り合う。しかしほとんどの場合、それは特定の友人とのたわいもないおしゃべりである。

これに対して、彼らが自らの伝達意図を不特定の相手に話しことばで表明したり、集団に対して投げかけられた話を自己の問題として受け止めたりする場合は、中学・高校と学年が上がるにつれ、減少するようだ。大学の授業で受講生との討論会を開くたびに、七割を超える学生が「今回のような議論の活動は、小学校の高学年でやって以来です。」と言つ。教師をなりわいにしようとする彼らにして、この有様である。彼らが経験する「二次的

ことば」は、大半が書きことばとしてのそれなのである。この状況がすべての学生にあてはまるわけではないが、なかには、後者の言語経験が極端に不足したまま成長した者もいるに違いない。そのうちのある者が、学生相談室の扉をノックしてくるのではないかと思うのである。

話しことばと身体性

右の解釈を示しながら、一方で私は、この解釈を単純に過ぎるとも思つ。教育活動としてかかる場が与えられなくとも、地域活動やサークルなど、彼らが「二次的

平成元年版学習指導要領下で学び育った学生たちが、

それ以前の教育課程で学んだ先輩に比してEとTHEYの関係によるコミュニケーションに欠如していたとも思えない。そもそも、「二次的

ことば」が決定的に欠如している者にとっては、これが欠如している事実

に悩む機会に出会った、ある生徒のことばを思い出した。中学校で私が不登校になつたきつかけは、ことばに

対する不信感にある。小学校高学年までの私は、授業や学級会で積極的に発言する子だつた。

小学六年生のある日、クラスで一人の女の子が同級生数人からいじめられていることを知り、「いじめはやめよう。」と学級会で提案したことがある。すると、それをきつかけにして、今度はわたしがいじめの対象になってしまった。ショックだったのは、いじめられていた例の子もいじめの仲間に加わつたことだ。この出来事を境に、私は他者の前で自らの考えをことばに

しなくなった。誠意をこめてことばにしても、るくなくことにならな

いという思いが、私の心に焼き付いた。以来、私は集団の一員として他人の声に耳を傾ける

ことができないまま、三年間を過ごした……。この知見にふれたとき、私は、ある国語教育研究会で

耳にした次の一言が忘れられない。

話しことは教育で私が何よりも大切にしているのは、教室のだれ一人も侮られることのない環境を作ることです。またそのような教室を築き上げるために、話しことは教育は必要だと思ひます。

発言の主は大村はま先生である。

なぜ「話すこと・聞くこと」の学習は必要か。その答えは大村先生の一言に尽きる。母と子のコミュニケーションに見られる他者のことばへの絶対的な信頼感を、子どもたちは学校教育でも十分に経験する必要がある。それがやがて「二次的

ことば」の世界に生きるための、真

一次のことばの復権

岡田敬司氏によれば、子どもの「二次的

ことば」の世界で経験されるからである。

「文献」岡本夏木一九八二『子どもことば』岩波書店／中田基昭一九九三『授業の現象学』東京大学出版会／岡田敬司一九九八『コミュニケーションと人間形成』ミネルヴァ書房

